



## 初日

---

今日は四月の一日。暦の上ではもう春だけど、まだ冬の寒さが残っている。でも桜はもう咲いている。植物は人間よりも気温の変化に敏感なのだ。

僕はただ、ぼーっと外の景色を眺めていた。さっきからひたすら緑ばかりの風景である。スーパーもコンビニもほとんどない。

「修一、もうすぐで家に着くけんな。いやあー、おまえも大変やったなあ。東京からこんな田舎に来て。なーんも無かところやろ？」

「そうですね...。」

本当にそのとうり。何にもない。田舎とは聞いていたが、さすがに都会から来た僕にとって馴染めそうにない環境である。

僕はこの春、東京の小金井市から長崎県の南部に位置する島原に引っ越すことになった。島原は島原半島に位置する小さな町だ。島原というと、中学の時社会で習った「島原・天草一揆」を思い浮かべてしまう。まあ、それ以外に島原について知っていることは何も無いのだけれど。とにかくそんな小さな町に僕が引っ越すことに決まったのは、つい最近のことである。

僕の両親は共働きで、父は法律事務所を経営しており、母は有名食品メーカーの品質管理の仕事をしている。二人とも仕事が大変で、夜帰宅するのも早くて午後9時くらいだ。母の手料理がまともに食べられるのは仕事が休みの日だけである。それ以外は学校から帰宅した僕がご飯を作る係になっている。おかげで大体の料理は作れるようになった。

小さい時から親はあまり家にいないし、僕を預かってくれる親戚も近くにいなかった。寂しくなかったと言えは嘘になる。でも働いて、僕をこれまで育ててくれた両親には感謝をしている。たとえ、二人が離婚をしても。